

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「Parzival」に於ける諸問題 <修士論文要旨>
Author(s)	藪下, 紘一
Citation	広大言語, 10 : 26 - 26
Issue Date	1970-12-15
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046344">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046344</a>
Right	
Relation	



## 「Parzival」に於ける諸問題

森下 紘 一

当論は五部分より成り、Niemeyer版を読み進むうちに目に止まった事共を列挙したにすぎない。

1. undとunde:両形式は全くarbitraryに出現していて何等意味上、修辞上の役割を異にしていない。前者が圧倒的に多い。
2. beginnen + Infinitive:始動態としてのみか、単に文章を飾る冗語のこともあることがわかった。現代ではanfangenが使われ、beginnenは十八世紀には既に古形と見做された。
3. 母音組織:一般文法書との異同を調べた。ä、öuはない。外来の地名・人名には様々の重母音がみられる。a, r, u, ü, ö, nu, eu, ue, oeは語末には立たない。最も多種の母音が現れるのは語中有アクセント音節である。
4. 否定表現:490例を6種の形態に分ける。nihtの単独使用が最多(201例)、ne(en)nihtが次(125例)。他の4種が残りを占める。史的推移、又表現(修辞)の観点からも詳述する為の足掛りとならう。
5. 合わない韻:韻の不整合の例を挙げ、分類し、ほぼ同時代の他の作品を引き合いに出し、解釈の手掛りとしてH. Paulの言を求めた。今後、Textkritikを自ら行なりこと、当代の方言に関する知識等を俟って初めて精確な記述が可能となる。

上記の如く、寄せ集めで、論文の体裁としては失格である。最低、仕事の為の問題提起、或はpoint of departureとしての価値を持つか否かは今後にかかっている。

(文責 本人)